

『平田篤胤 狂信から共振へ』第2回公開書評会
吉田唯・三ツ松誠・木村悠之介諸氏の論文に対する書評

栗田英彦（佛教大学）

castanea1127@gmail.com

0. 自己紹介

- ・ 専門は近代日本宗教史・思想史。特に民間精神療法（霊術）・修養の歴史。
- ・ 共編著『近現代日本の民間精神療法—不可視なエネルギーの諸相—』（国書刊行会、2019年）『「日本心靈学会」研究—霊術団体から学術出版への道—』（人文書院、2022年）、「日本主義の主体性と抗争」（『近代の仏教思想と日本主義』法藏館、2020年）。
- ・ 共著『コンスピリチュアリティ入門』（創元社、2023年）、太田竜関連論文、「1968年と宗教」シンポジウム（第1～3回）の開催。
- ・ 1940年代の対内思想戦や1968年論と宗教史との交錯にも関心。

【書評担当論文】

〈「第二部 時代を超えた共振」所収〉

- ・ 吉田唯「コラム3 平田篤胤と酒井勝軍の神代文字観—「完全言語」として—」
 - ・ 三ツ松誠「第八章 寅吉をめぐる冒険」
 - ・ 木村悠之介「第十一章 再生する平田篤胤—世紀転換期の「神道史」叙述における「事実」と「想像」をめぐる—」
- いずれも近代宗教史（霊性思想・神道史）における平田篤胤の影響を論じた論文。加えて、いずれの論文も宗教史（および史観）と政治史（政治的背景・政治運動・政治思想）との関連を強く意識している。
- 評者は、まずは、専門の霊術史・修養史・広義のオカルティズム史（教団の外に広がる「宗教的」な思想運動の歴史）と政治思想・運動の観点からのコメントが求められていると思われる。
- 一方、平田篤胤・近代国学・近代神道史については、最近になって近代霊性思想との関連を取り組むようになったので（これまでは近代仏教史との絡みが多かった）、その観点からの適切な評価については心もとなく、むしろ今回の論集著者の皆さんから学びたい。

1. 本論文集全体へのコメント—「序章」から

【篤胤と「共振」】

「「共振」とは、一見無関係で遠くにあるかのような学問・思想・信仰が、学知として相互に響き合う実践の現場を捉え、それまでみえていなかった知の可能性を発見

する方法概念である。「篤胤は、まさしく「共振」する幅が時代や空間・地域性をも超えて広がっていく存在でもあった。」(5頁)

「「共振」は、篤胤を「狂信」したり忌避したりする必要などないところから、あらためて篤胤の可能性を見出す視座である」(10頁)

- 時空を越境する「(学)知」を「実践」として捉える視点
- 言説研究に代表される知の権力性を、むしろ「実践」としてポジティブに把握する。
- 明治維新や第二次世界大戦からも時間的距離が生じた現在が、「共振」という視座を可能にした？

【戦後篤胤研究の歩み—「狂信」から「共振」へ】

<敗戦直後>

- ・ 1950年前後：「戦前に吹き荒れた軍国主義のイデオログ」「「狂信」的なナショナリストとして忌避される対象」(6頁)
 - cf. 和辻哲郎『日本倫理思想史』下巻(1952年)／(例外)村岡典嗣『平田篤胤』(1946年)…「「新日本の文化的創造」のエネルギーを看取」(6-7頁)
 - ・ 1960年前後-60年代：「狂信」と距離を取りつつ別の可能性をもった篤胤像を模索(7頁)
 - cf. 村岡典嗣『宣長と篤胤』(1957年…本居-文献学／平田-宗教学)、田原嗣郎『平田篤胤』(1963年)、三木正太郎『平田篤胤』(1969年)
 - ・ 1970年代：篤胤研究の新段階—民俗学・宗教学を媒介として
 - 相楽亨「日本の思想史における平田篤胤」(1972年…仙界・幽冥界研究を民族学の先駆と評価した折口信夫の講演「平田国学の伝統」が媒介)、子安宣邦「平田篤胤の世界」(1972年)、同『宣長と篤胤の世界』(1977年)、小林健三『平田神道の研究』(1975年…玄学研究・その継承としての宮地神仙道への注目)
 - 『靈能真柱』『仙境異聞』『勝五郎再生記聞』『稲生物怪録』などへの評価
 - ・ 1990年代：ポストモダンとオカルトブームの篤胤研究
 - 鎌田東二『場所の記憶』(1990年)～『平田篤胤の神界のフィールドワーク』(2002年)、荒俣宏・米田勝安『よみがえるカリスマ 平田篤胤』(2000)、吉田真樹『平田篤胤——靈魂のゆくえ』(2009年)、小林威朗『平田国学の靈魂観』(2017)・・・靈魂観研究の進展
- 「狂信」→脱「狂信」・靈魂論へ
- ・ 2000年代：平田家関係資料が国立歴史民俗博物館で整理・公開
 - cf. 宮地正人『歴史のなかの『夜明け前』』(2015年)、吉田麻子『知の共鳴—平田篤胤をめぐる書物の社会史』(2012年)、遠藤潤『平田国学と近世社会』(2007年)

【本書（特に今回の書評担当論文）の独自性】

- ・ 以上の民俗学・幽冥界・神仙界・玄学・霊学・靈魂論の観点からの篤胤評価（A）、そして幕末・維新时期という同時代的な政治・社会の文脈と関わらせた篤胤像という研究の視座（B）を共有しつつ、さらに近代という同時代への「共振」を見ようとする点で特に独自性がある。近代への「共振」の位相を見ると、①AとBの統合、②国家神道とも交錯する「異端神道」（出口王仁三郎や酒井勝軍）、③明治後期以降の近代的な学知（宗教学・神道学・民俗学、あるいは宗教概念の確立）との関係を探求する点に独自性がある。
- ・ （加えて、和辻の平田派認識における「狂信的情熱」と（近代における）平田派没落史観の相対化という問題意識があるが、そこで重要になってくるのが、出版メディアへの視点であり、その延長線上にメディアとしての学知の問題がある。）
- ・ 特に本書第二部の篤胤研究としての意義は以下のように要約できる。
 - ☞ 和辻に代表される平田派＝「狂信」イメージや近代における平田派没落史観の塗り替え（これ自体はすでに積み重ねられてきた）
 - ☞ 民俗学・幽冥論・霊学と政治・社会の接続（三ツ松）
 - ☞ 国家神道と「異端神道」に跨る篤胤の遺産（吉田）
 - ☞ 「狂信」イメージを相対化する「共振」の場としての出版メディアと学知（木村）
- （「共振」現象が基本的形態である）霊性思想史の観点から見ると、むしろ平田派国学という日本のコンテクストの強い実践性の強い「知」と絡みあうことで、むしろ「狂信的情熱」を孕みえたのではないか、ということも言える。
- また、本書で重要な仮想敵となっている和辻だが、その言説は、戦時下における対内思想戦の延長で捉えることができる（栗田の2020年度の日本思想史学会発表「第二次世界大戦最終局面の思想戦——西田幾多郎と佐藤通次の論争を通じて」）。つまり、和辻（および京都学派）に対して、平田の意義を説くという立ち位置は、戦前に対内思想戦を遂行した日本神話派（言論報国会中枢部）の思想に近いということである。それは単に「戦前に吹き荒れた軍国主義のイデオログ」「狂信的なナショナリスト」というのではなく——その点では和辻自身も「天皇への随順」を徹底すべきで「国家を無視せる宗教的行」を行うべきではないと批判しており、読みようによっては十分に「狂信的なナショナリスト」なのであり——問題は、むしろ「狂信的なナショナリスト」のなかでの差異であろう。和辻が宣長に範を取って天皇への随順を解くのに対して、日本神話派の佐藤は天皇の護持を説く。つまり、和辻は随順を押しすることで能動的な実践を批判しているのであり、佐藤はそれに対して思想（思惟）の根底には実践があるのであり、それゆえたとえ随順であっても（思惟に留まるように見えても）実はすでに実践になってしまっていて、和辻（京都学派）はその実践性に無自覚、あるいは隠蔽しているという主張だった。このような佐藤の主張は、知は権力であるというニーチェ〜フーコーと

いった系譜学やポスト構造主義の主張にも通じている。

- 本書が和辻のネガティブな篤胤評価に対抗するとき、実は日本神話派的立場を、戦後に密輸入することになっているのではないか。これは、そうだからよくないと言うのではなく、むしろその点の自覚に関わっており、佐藤の問題意識からしても、さらに時空を越境する「知」を「実践」として捉えるという本書の「共振」の視点からも考える必要がある問題である。つまり、篤胤の「共振」現象を対象化する本書そのものもまた、篤胤の「共振」の場そのものと言えるのではないか、ということである。

2. 三ツ松論文「寅吉をめぐる冒険」へのコメント

【「序章」における要約】

「三ツ松誠の一連の論考は、まさにこれまでの研究史を押さえながら、篤胤や平田派の幽冥論が外圧迫り来る幕末から文明開化の明治初期においていかに対応に苦慮したかを浮き彫りにするものである。そこには、政治・社会の動きと切離して進められる幽冥界・霊学に関する研究への一貫した批判が込められている。宮地の仕事と連動しつつ新たな段階へ踏み出し始めた。」（10頁）

- 先述した幽冥界・霊学の議論を、非政治的文脈ではなく、宮地的な幕末維新期の政治・社会なコンテクストに置きなおして、その政治的意味を捉えようとする論考。
- 篤胤霊学の（再）政治化とも言うべきもので、さまざまなタイプの非政治的（中立的）幽冥論を徹底批判する。

【自分なりの要約（というか着目点）】

<1968年への言及とそれ以降の篤胤研究の認識のズレ>

- ・ 「序章」の篤胤研究を巡る研究史の流れを一部、共有しつつ、1968年との絡みに触れている点で特徴的である。

「戦後の近代主義的空気への反動が生じる中で、さらに新たな研究動向がもたらされた。学生運動の混乱を経て、主として共産主義への可能性によって基礎付けられてきた現代社会に対するオルタナティブを求める動きが、合理主義批判・理性への懐疑の形をとるようになり、神秘的なもの、あるいは土俗的なものへの関心が高まりを見せたのである。……こうした「オカルト的なもの、非合理的なもの」への志向の中で、維新の志士の指導者としてではない篤胤学への注目ももたらされたのである。」（205-206頁）

- ・ なお、1974年の島田裕己（1953生）や四方田犬彦（1953生）東大の宗教学進学に合わせて、柳田國男再評価や前近代への再注目が論じられているが、この風潮自体はすでに1970年の島藺進（1948生）ら全共闘真ただ中の世代からも生じているⁱ。武田崇元（1950生）もまた島田や四方田に先んじている。つまり、全共闘の挫折というより延長

の可能性と見る観点もありうる。

- ・ ともあれ、このオカルト的・前近代的転回のなかに、相良亨「日本思想史における平田篤胤」（1972年）以下、子安宣邦、鎌田東二らも位置づけられる。相良論文は、「倒幕につながる政治運動への影響」ではなく、折口信夫「平田国学の伝統」を手掛かりに、「日本の靈魂観の探求者、民俗学の先駆者」として篤胤を位置づけて再評価。なお、三ツ松論文では、このような篤胤像の出発点としての折口「平田国学の伝統」への評価は低い（210頁）。
 - ・ オウム事件によるオカルト的転回の挫折の後、（あるいは平田派資料の整理によって）吉田麻子・宮地正人の「新しい平田国学研究」が登場したという流れ。⇔ 「序論」：「ポストモダン風潮下」（8頁）のなか、オウム以後も霊学・靈魂の視点からの研究は盛んになり続け、今に至っているという見方。
- 「序章」と三ツ松論文での違いは、ポスト「1968年」や「ポストモダン」をいかなるものと捉えているかの違いを表しているように思われる。
 - また吉田と宮地の違いを明確化。前者が「靈魂論的・民俗学的篤胤像」（207頁）の流れ、後者を「被支配階級」の「政治的行動」とする。⇔ 「序章」：区別せず。
 - つまり、三ツ松論文では、ポスト「1968年」の篤胤研究を「靈魂論的・民族的篤胤像」と捉えて「非政治」化（207頁）—「過激な政治運動家」の「国学の伝統」からの「排除」（210頁）、あるいは別論文の表現を使えば「ナショナリスティックな側面を取り上げることを回避」ⁱⁱ—と見るが、「序章」ではむしろそれを「共振」の先駆的流れに位置づけている。ここから、実は「共振」の視点は、三ツ松氏の観点からは非政治化に見えているのではないか、と邪推する（「共振」の概念が用いられない）。

【評者からのコメント・質問】

- ・ 三ツ松論文では、「靈魂論的・民俗学的」篤胤を再政治化するために、『仙境異聞』が政治—宗教的運動でいかに受容、利用されたかを列挙。以下。
- ① 「仙境異聞」内の「対外戦争に備えた幽界の砲術」の話題。海防意識の高まりの反映。それが三輪田元綱（綱丸、足利三代木像梟首事件逮捕者）ら平田派門人に兵学・軍学に向かわせた。
 - ② 「仙境異聞」の後継作「幽界物語」では、アヘン戦争の背後に妖魔の存在を見て、神々の意志を伝えるメディアの役割を果たすようになる。維新後も平田派（市岡殷政、矢野玄道門下、丸山作楽門下、三輪田元綱ら）は、政治的危機や維新政府への不満のなかで未来予示や神々の意志をたびたび「幽界」と交渉した若者に求めるようになる。
 - ③ 宮地神仙道の流れから、星野神学で国家神道イデオロギーを統一しようとした（が挫折した）星野輝興に及ぶ影響。（斎藤論文詳述）
 - ④ 明治43年、宮地神仙道から柳田國男。ただし、大本が席卷する大正期以降は、神仙に

十分な信憑性は認めず。

- ⑤ 大正期、心霊主義ブームの影響を受けた大本や後継（出口王仁三郎、浅野和三郎、友清、歓真）における「仙境異聞」や「幽界物語」への注目。それらの「政治運動あるいはウルトラ・ナショナリズムへの傾斜」（220頁）。
 - ⑥ ナショナリスティックな主張と政界進出で知られる幸福の科学における「仙境異聞」への注目。
- 「ウルトラ・ナショナリズム」の政治運動、危機的状況下での過激なナショナリズムとの関係を例証。
 - ただし、柳田との関連については「民俗学自体がナショナリスティックな欲望を伴う、その意味で決して政治運動と切離しうるものではない」（222頁）としたうえでの事例。ここに話が及ぶと、結局は「序説」での「共振」と話は近づいていく。そもそも、三ツ松氏が問題視する折口についても、斎藤英喜氏は「共振」の語によって影山正治の「超国家主義」と結びつけている（斎藤『折口信夫』ミネルヴァ書房、2019年、275頁）。
 - そうだとすれば、三ツ松氏における政治／非政治は、どこで区別されるのか。例証された事例も細かく見れば、①軍事、②政府批判、③思想統制（星野神学）、④学問に擬制したヘゲモニックな政治、⑤黙示録的変革、⑥議会政治と、実はそこで政治と言われるものの内実はかなり異なる。これら全てを「政治」と呼ぶならば、「霊魂論的・民俗学的篤胤像」は「非政治」などではなく、もっとも巧みな（あるいは無自覚な？）「政治」なのではないか。そして、さらに言えば、上記の①から⑥まで全てが、赤軍派、評論、文化左翼や反差別、アカデミズムへの転戦、黙示録的革命論、社会党への加入など、ポスト「1968年」の政治運動の側でも生起していた（つまり「オカルト的転回」もまた政治ではないか）。
 - それゆえ、三ツ松氏の「非政治」批判とは、もう少しパラフレーズして述べるなら、どのような事態に対する批判であり、どのような事態へと打開すべきと考えられているのかをお聞きしたい。

3. 吉田唯「平田篤胤と酒井勝軍の神代文字観」

【「序章」における要約】

「篤胤論にとって重要な要因である「神代文字」観を通して、篤胤と昭和戦前期の酒井勝軍とを並べ、両者ともに「完全言語」としての「神代文字」を求めていたとする。「完全言語」は、むろん天皇機関説を批判し天皇の超越性を打ち出すところに成立するが、今後はファシズムの語で一括できない多様な知の位相の究明を期待したい。」（11頁）

【評者なりの要約】

- 篤胤と酒井の神代文字の比較と影響関係についてのコラム。①ヒフミ文字（アヒル文字

=阿比留文字)の選択、②50音図神聖視、③すべての文字の起源としての神代文字(完全言語)といった点で両者は一致し、実際に酒井の雑誌『神秘之日本』では平田派の大国隆正の神代文字研究に言及していた。篤胤と酒井の「共振」。

- 酒井の神代文字論における政治・社会的な時代背景として、国体明徴運動の指摘。「古史古伝の世界(=神武以前の世界統治)の復活」「世界天皇の夢」として。ただし、「酒井は、日本を世界の中に言語的・思想的に位置づけることが最大の目的だったと考えられる」(318頁)。

【評者からのコメント・質問】

- 篤胤はともかく、酒井が神代文字を盲目的に信じていなかった理由は何か。『神字考』以降もそうなのか。
- 篤胤が後の神代文字論の発端にある(山田孝雄「所謂神代文字の論」)ならば、酒井の神代文字論がその影響下にあることは、それ自体は自明のように思われる。むしろ、酒井は竹内文書との関連で考えられるべきではないか。酒井の転機に国体明徴声明が指摘されているが、1924(大正13)年から1936(昭和11)年のあいだには、1929(昭和4)年に酒井がその前年に公開された竹内文書を見ている。神代文字信奉への移行は、国体明徴声明というより、単に竹内文書の閲覧にあったのではないか。むしろ、酒井の特異性は、昭和11年に竹内巨磨が不敬・文書偽造・詐欺の容疑が逮捕され(2月)、狩野亮吉によって「天津教古文書の批判」の徹底批判(6月)があったにも関わらず、あえて7月に「神字考」を発表したことである。
- 酒井の神代文字論は、篤胤以上に、竹内文書との関連を抜きにしては論じられないと思われるが、その点は捨象して篤胤とダイレクトな「共振」が論じられたのは、本論集のテーマに沿ってのことだと思われるが、少なくとも、篤胤→竹内文書→酒井の異同を考えなければ、自明な話をなぞるに止まるように思われる。
- 神代文字論を論じながら、『オエラ・リンダの書』や人種優位論に共鳴せず、ユダヤに親和性を求めた理由が、「世界の起源、言語の起源を意識してのこと」とされるが、酒井の親ユダヤ主義・日ユ同祖論は、竹内文書との出会い以前にまで遡る(竹内文書との出会いで強化されたにせよ)。それならば、酒井が『オエラ・リンダの書』の北方人種論や反ユダヤ主義的人種優位論に共鳴しなかったのも自明である。むしろ、酒井が人種論に傾きすぎなかった理由は、天皇が単に日本の天皇ではなく、シオニズムとも結びついた一民族を超えた世界の天皇と認識されたからではないか(しかし、それでも日ユを同祖と考えていたのだから人種優位論ではないとは言い切れないはず)。

4. 木村悠之介「再生する平田篤胤」

【序章での要約】

「近代の学問知の中での篤胤再生」のあり様を丁寧に追う木村は、久米邦武・足立栗園・田中

義能・木村鷹太郎等の世紀転換期を含む言説を追いながら、「煩悶の青年」たちのエートスとして新たな「宗教」の誕生と篤胤の再生を語る。これが二〇世紀なのだ・・・！と。しかも、篤胤の論に賛成するか反対するかにかかわらず、「共振」という視座から位置づけようと試みるところに木村論文の特徴がある」（14頁）

【評者なりの要約】

<問い>

- ・近代神道論における篤胤思想の「意味」変化とは何か。幽冥論の減退でよいのか。
- ・篤胤思想～神道論が毒抜き・包括した「危険」思想とは何か。

- ・木村氏の共振の定義

☞ 篤胤との「共振」：「篤胤に自分をなぞらえたり他者から類似を示唆されたりすること」（288頁）

<“共振”の事例①：久米邦武「神道は祭天の古俗」（1891年／明治24）>

- ・合一論：服部天遊＝篤胤＝天照大神とキリスト教の神を合一しようとして失敗したもの（by井上哲次郎）⇒久米は祖先崇拜を切り捨て、「天」への「想像」に一元化したことで批判されて失敗。しかし、合一論は教派神道諸派の神道改革に継承、篤胤は改革のアイコンへ。
- ・古代神道（＝祭天）非宗教論：古代の「事実」と後世の「憶測」。古代と異なった「宗教」にしてしまったのが篤胤だという「考証」へ（久米→小中村清矩、重野安繹）
- ・篤胤支持の神道「改革」／篤胤批判の「考証」⇒木村鷹太郎の「新神道」…イギリス流「実験哲学」、排「宗教」、事実を超えた「理想」としての「忠君の情」「生々」。

➤ 万教帰一的な久米・神道改革／「宗教」否定的な考証（事実）・新神道（理想）

<“共振”の事例②：足立栗園『批判的日本仏教史』（1899・明治32）>

- ・煩悶状況の登場、宗教経験としての「実験」論の流行⇒山川智応・姉崎正治・久米らは万教帰一的「宗教」の必要を主張。神道青年運動「神風会」では、篤胤の「神道は万国の道なり」という方面への展開を主張。
- ・『批判的日本仏教史』が篤胤『出定笑語』の排仏教と同じだとされた足立は、篤胤になぞらえつつ、1901（明治34）年の『近世神仏習合弁』『神道発達史 上巻』で神道の「宗教」化を目指す。

<“共振”の事例④：田中義能『平田篤胤之哲学』（1909・明治42）>

- ・神風会と繋がりが深い田中は、考証派を乗り越えて死生問題に応答しようとし、篤胤を神道の「宗教的方面」の展開に力を尽くしたと評価し、そこにみずからの「神道哲学」

- に重ね、神道だけが他のあらゆる思想や宗教を取り込んで「進歩」しようと主張した。
…「二〇世紀の新たな篤胤像」（299頁）の登場。同時代の学会へ波及。
- ・ 田中らは、宗教的要素としての天御中主神は「想像」であり、神社とは別位相とした。

<“共振”の事例⑤：木村鷹太郎『世界的研究に基づける日本太古史』（1911年・明治44）>

- ・ 木村鷹太郎の「宗教」肯定への移行。「新史学」。国学を「世界統一学」に。「王政復古」＋「神代復古」の「神政（を）復古」の主張。排仏教から『印度蔵志』、キリスト教の取り込みに至る「明治の平田」としの木村。
- ・ 木村の「神政復古」は、出口王仁三郎や酒井勝軍に引き継がれる。

<まとめ—森鷗外「かのやうに」に絡めて>

- ・ 鷗外「かのやうに」は、単に国家神道の虚構性暴露の小説ではなく、「事実」と「宗教」を分離しようとした考証派を乗り越えようとする上記の様々な歴史記述を視野に入れた。
- ・ 近代神道論における篤胤は、考証派では幽冥論の減退かもしれないが、久米から木村まで「幽冥」という「宗教」問題は、青年の煩悶に答えるだけでなく、歴史記述の土台として不可欠であった。
- ・ ただし、一連の歴史記述でも「宗教」は「想像」「信念」の「熱心」さの位相にあり、「事実」（＝祖先崇拜）とは異なるものとして処理された。このとき、知識人は人間世界の外を希求しつつも、結局は「フアナチスム」＝「狂信」そのものではなく、狂信「かのやう」な何かを発現させることになる。

【評者からのコメント・質問】

- 「狂信から共振へ」という本書の問題そのものへの問いを含んだ好論考。
- 久米から木村まで、それらは結局のところ篤胤への「共振」＝「かのやうに」に他ならない、ということを示唆しているように思われる。そうであれば、本論文集を篤胤への「共振」と見るならば、本論文集自体にも当てはまる。
- また、三ツ松論文における政治／非政治の区分もまた、狂信／共振（かのやうに）に重なるものであるとするならば、そこで挙げられた①～⑥の事例を等しく「政治」＝「狂信」と捉えることには問題があるのではないか。
- 篤胤および平田派の「狂信」とは、まさに維新期の原動力となり、さまざまなテロリズムという形で少なくとも「かのやうに」の外側に飛び出していくことにおいてある。
- そうしたとき、木村論文が「かのやうに」を扱いながら、この小説が示唆しているとされるもう一つの事件である大逆事件に触れていないのが若干気になる。大逆事件に対して、鷗外「かのやうに」の批判は獄中でも『基督抹殺論』を書いた幸徳の啓蒙的「王殺し」には届くが、菅野すが子の「ヒステリー」による「迷信ノ根本」への破壊には届かないⁱⁱⁱ。

- このように考えるとき、星野神学の挫折を超えて、東條内閣化で本土決戦を見据えながら対内思想戦を敢行した日本神話派における篤胤との“共振”は、しょせんは「かのやうに」なのか、それとも「狂信」なのか、木村論文から刺激を受けて、この問題について考えてみたいと思う。
- いろいろと述べてきたが、ともあれ、「知」という営みそのものの意義を問うるといふ点で、評者にとって非常に根源的な意味で知的な刺激を受けた論文集・諸論文であり、篤胤研究の画期であるだけでなく、人文学そのものの画期にもなりうる可能性を秘めているように思われた。

i 弓山達也「書評 島藺進著『現代救済宗教論』『東京大学宗教学年報』一〇号、一九九三年、二一四頁。

ii 「ナショナリスティックな側面を取り上げることを回避して、靈的世界の探求者としての篤胤に注目する傾向があった。しかし政治運動に関わった人々の主体形成に篤胤国学が影響下ことは否定しがたい」（三ツ松誠「平田神学の遺産」『宗教研究』92巻2号、2018年、183頁）

iii 絳秀実『「帝国」の文学——戦争と「大逆」の間』以文社、2001年、248～269頁。